

た小腸疾患は65例あり、全手術症例の3.4%となっている。その内訳は腸閉塞症39例、小腸腫瘍4例、潰瘍性病変6例、外傷性損傷14例となっており外傷性損傷が比較的多く認められる。異物性腸閉塞としては、コンニャク、コンブ、魚骨、胆石があり、外傷ではハンドル外傷による空腸の完全離断を呈示した。術前診断については、悪性リンパ腫の穿孔性腹膜炎と結核による腸閉塞は緊急手術が施行されたが、出血性平滑筋腫2例、クローン病3例、回腸末端の腺癌による腸重積はX線の存在診断が可能であった。

小腸病変は上部消化管、大腸疾患に対する除外診断がなされた後、検索されるのが常であり、診断も比較的困難ではあるが、二重造影法が存在診断に非常に有用であった。

26. 当院におけるイレウス手術症例の検討

渡辺 和義, 林 恒男, 田中 精一
上田 哲哉, 竹内 成子, 今里 雅之
塚原 祐二, 金子 篤子, 広瀬はるみ
武雄 康悦 (中山記念病院)

当院において開院以来約5年間でイレウス手術症例は54例あり、内訳は単純イレウス30例、絞扼性イレウス24例であった。そのうち比較的可成りと思われる3症例を供覧する。

1例目はビルロート2法による再建後に生じた、急性膵炎と鑑別困難であった内ヘルニア症例。2例目は急性虫垂炎と鑑別診断が難しかった大網裂孔への回腸嵌入によるイレウスでこれは文献的にも13例の報告しか見られなかった。3例目は成人になって手術を施行された腸回転異常症I型の1症例である。

以上3症例はまれな症例であるが、当院のイレウス手術症例の原因として手術後の腸管癒着が多く認められた。今後の手術操作の教訓となる症例も多く勉強を続けてゆきたい。

27. 酸素吸入療法が奏効した *Pneumatosis coli* の1例

野上 厚, 吉井 克己, 野方 尚
飛田 洋一, 原田 昌弘, 尾原 徹司
(尾原病院)

粘血便と下痢を主訴に入院した60歳の女性。腹部X線、注腸造影、大腸内視鏡検査を行いS状結腸に発生した *Pneumatosis coli* と診断した。症例に対しフェイスマスクにより5L/分、5時間/日、2週間の酸素吸入療法を行い、治癒せしめた。

本疾患は、大腸の粘膜下層あるいは漿膜下層に多発

性のガス嚢胞が存在するという臨床稀な疾患である。その発生原因について未だ定説はないが、良性疾患であること、自然治癒もあること、再発の問題などから保存的治療が第一選択と考えられる。今回我々の治験例も含めて、酸素吸入療法は極めて有効であると思われたので、若干の文献的考察を加えて報告する。

28. 大腸マラコプラキアの1例

吉田 裕, 増山 克, 山名 泰夫
(長汐病院)

広瀬 幸子 (順天堂大学医学部第2病院)

マラコプラキアは、病理組織学的に極めて特異的である。すなわち肉眼的には中心に小潰瘍を伴う柔かく黄褐色の結節であり、消化管系では粘膜および粘膜下層に認められる。光顕的には大単核性のマクロファージの集積として見出されその細胞内外に石灰化された封入体、ミハエリス=ガットマン体(以下MG体)として特徴的である。今回我々は、大腸マラコプラキアの症例を経験し、更に電子顕微鏡的検討を行った。その結果、光顕的にPAS染色にて赤染したMG体はライソゾーム内にとりこまれたグリコーゲン顆粒として見出された。その中にミエリン様物質にとり囲まれたグリコーゲン顆粒を認めたが、石灰化された部分は認められなかった。また大腸菌群の残遺物は認められなかった。以上より本症例は、マラコプラキアの局在形の初期段階と思われる。

29. 当院における大腸癌の検討

北畠 滋郎, 島田 幸男, 戸田 智博
南園 義一, 長崎 進

(防府消化器病センター)

近年大腸癌は社会環境、食生活の変化に伴い増加傾向にある。今回我々は昭和43年~62年までの20年間に当院で扱った大腸癌症例347例について、臨床病理的に検討したので報告する。また、このうち昭和42年~57年までの切除166例について、直腸癌と結腸癌に分け5年生存率に及ぼす各因子を比較検討した。

症例数は年々増加しているが、男女比、年齢構成には目立った差はなかった。部位別には直腸癌は170例、結腸癌は204例で、特に直腸癌とS状結腸癌が多かった。肉眼型は限局潰瘍型と浸潤潰瘍型が多く、組織型ではほとんどが分化型腺癌であった。5年生存率は大腸癌全体で42.7%、直腸癌43.5%、結腸癌42.6%で予後に差はなかった。壁深達度、stage分類、Dukes分類と5生率には相関関係があった。

30. 慢性日本住血吸虫症を伴った大腸癌の病理学的